

与兵衛長屋つれあい帖2

～お江戸の縁むすび～

かずえ Kazue



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

序章

5

はつこい

11

太夫の旦那様

105

あこがれ

235

終章

307

序章

「おや、おふくちゃん。ずいぶん早起きだね」

「おはようございます、おかめさん。おかめさんこそ早いですよ」

まだ夜も明けやらぬ刻限。一人静かに起き出して井戸端で顔を洗っていたふくは、声を掛けられて笑顔で振り返った。

ふくが、与兵衛長屋に暮らす絵師の遊齋の元に嫁いで半年。

嫁ぐ前から長屋の出入りのたびに言葉を交わしていたおかめの声は、振り返る前から聞き分けられたのだ。

「年寄りつてのは、朝が早くて難儀だね。起きていたってどうせやることあ少ないつてのに。神様もさ、年を取ったらたくさん眠れるようにしてくれりゃいいんだよ。その方が辻褄が合うと思わないかい？ まったく困ったもんだ。その上、厠も近いときた。めんどくさくてたまったもんじゃないよ」

「あはは。元氣な証拠だよ、おかめさん」

おかめの口は朝も早くから絶好調である。ふくは大口を開けて笑いかけ、少しだけ声を落とす。

九尺二間の裏長屋である与兵衛長屋は、壁を隔てて七つの部屋がある棟が二つ、向かい合わせに並んでいる。今は、十四ある部屋の内十二の部屋に人が住んでいた。

おかめとふく以外に起きている者はいないようで、寢息といびき、寢言がどこからともなく聞こえてくる。夜にも静かとは言い難いのはどの長屋も同じであるようだ、とふくは思った。

「せめてもう少し厠の近くに部屋を移してもらおうかねえ」

おかめの止まらぬ愚痴に、ふくはくすくすと笑う。

「そうすると木戸から遠いよ？　おかめさん」

「そうなんだよねえ。ままならないもんだ、まったく」

木戸番として、長屋を出入りする人を見張るのがおかめのお役目だ。木戸から最も離れた場所にある厠の近くに居を構えては、お役目が果たしづらいだらう。

確かに、どうも物事というのはままならないものであるらしい。

「それで？　あんたは？」

「え？」

「なんだってこんなに早起きなんだい？」

ああ、とふくは頷いた。自分の話したいことだけ話して、はいお終い、と立ち去らないのがおかめの凄ところだ。相手に感じた違和感をしっかりと確かめてくる強か

さが、長年木戸番を任されている所以か。

「今日は、遊齋さんが宇多磨先生のところに行くって言ってたから、弁当を多めに作るうと思つて」

「へえ？」

描くことに夢中になると寝食もうっかり忘れる遊齋だが、恋女房のふくの作つた飯を残すことは決してない。だからふくは、毎日遊齋に手弁当を準備していた。

嫁いだ後も実家である煮売りの居店、万屋万八での手伝いを続けているため、いくつかのおかずを持ち帰つてきて朝に作つた握り飯と共に持たせるくらいしかできないが、それでも遊齋は、この世で一番旨い飯だと喜んでくれていた。

そんな遊齋の弁当は、遊郭に住まう師匠の宇多磨の元へ師事に行つた際には、どうやら師匠の腹におさまつてしまつているらしい。夕餉を食べながらの話でそれを察したふくは、それなら宇多磨先生の分もと握り飯を作るようになった。更にはどうやら宇多磨の好い人である浮雲太夫までもが口に行つているようだと言つて数を増やした。遊齋が寝食をおろそかにする質であるを知っている宇多磨やその周りの者が、必ず代わりの食事を遊齋に渡しているだろうことは察せられるので心配はしていないのだが、どうせなら三人分持たせれば良いのか、と思ひ至つた次第。

そこで張り切つてしまうのは、食事処の娘の性であろうか。美味しいと食べてもら

えることが嬉しいふくにとつて、たくさん作ることはちつとも苦ではなかった。

よくよく考えたら、さぞかし良いものを食べているであろう太夫の口に本当にふくやふくの父、兄が作つた食事が合うのかと首を傾げてしまふようになるのだが。

今日も師匠も姐さんもすごく美味しいって喜んでいたよ、と笑顔で帰つてくる遊齋を見ると、とても嘘を言っているようには見えなかった。だいたい、遊齋は絵を描くこと以外に関して大概ぼんやりである。ふくに気を遣つて嘘を吐くなど考えもしないだろう。そうであれば、宇多磨先生も浮雲太夫もきつと美味しいと食べてくれているのだ。気合も入ろうというもの。

ふくは、よしと櫛をかけた。

そんなふくを見て、無理はしないようにね、と言つたおかめが厠へ入つていく。

「はあい」

ふくはいつもの倍の米を米とき桶に入れると、がっしがっしと力強くとき始めた。

与兵衛長屋に、今日も変わらぬ朝がやってきた。

はつこい

一 商家の娘

「おはよう、おみつちゃん。今日も早いね」

「おはよう、おとみさん。私、そんなに早くないよ。おふくさんなんてもう米を炊き終えていたもの」

夜明けとともに起き出したおみつが厠で用を足し井戸で顔を洗って戻ると、隣に住むおとみから声が掛かった。

いつもの朝である。春の終わりの季節は大層過ごしやすく、人々の動きも軽い。

「まあた、あの子は。本当によく働くね。無理をしてなきやいいんだが」

「おはよう、おとみさん。相変わらず楽しそうに飯を炊いてたから問題ねえんじやねえかなあ」

おみつの後ろから声を上げたのは、許婚いいなすけの作次さくじである。

作次もおみつと共に起き出して共に厠で用を足し、井戸で顔を洗って戻ってきたのであった。その手には、井戸で汲んだ水がたつぶり入った手桶が提げられている。力

仕事はおいらに任せろ、と請け負ってくれる作次がとても頼もしい。

物心ついた頃から父はおらず、よむいとお齡十で母も亡くしてから、おみつは一人で何でもこなしてきた。馴染みの呉服屋こぞむに仕立てた縫い物を届けた帰り道、同じくひとりぼっちの作次に出会ったことで、おみつの暮らしは変わったのだ。

そして今や、共に暮らす作次の存在はますます大きくなっていった。気兼ねなく頼れる相手、家族というのはいいものだ、なんてしみじみ思う。

もちろん、一人になってしまったおみつを温かく見守ってくれていたおとみや長屋の人々へも親愛の情はあるのだが、どうしても申し訳ない気持ちに先に立ってしまった。余程でない限り甘え頼ることができなかったのだ。作次と暮らすようになった後の方が、遠慮なく皆の親切を受け取れている気がするのには不思議なことであった。

「作ちゃん、おはよう。あの子は本当に食べるのが好きで微笑ましいね」

「ああ。絵を描いてたら食事を忘れちゃう遊斎さんとは正反対だ。おいらはあの二人が夫婦めおとつてのが不思議で仕方ねえや」

「ふふふ。まあねえ、夫婦つてのは案外そういう感じの方が上手いくのかもしれないよ？」

「え？ そうなのかい？ おとみさんとこも？ なあ、おいらとおみつちゃんもそういうとこあるかな？」

「ふ、ふふふ。まったく、作ちゃんは……。心配しなくても、作ちゃんとおみつちゃん
の相性は抜群だよ。あたしが保証するさ」

「え？ そうかな。へへ、良かった」

おとみの言葉に少し照れて、でも嬉しそうに笑った作次がおみつの方へ顔を向けて
くるから、おみつもここにこ笑った。

周りの人からも家族に見えているなら嬉しいことだ、とおみつは思ったのだ。

おみつと作次が共に暮らし始めて四年が経っていた。

ふたりは、今日も仲良く与兵衛長屋で暮らしている。

おみつが、湯屋ゆやで知り合った商家しょうかの娘、おつのおおそめに誘われ三味線しゃみせんを習い始め
てから半月ほどのこと。

本日も、おつのおおそめとそれぞれのお付きの女中たち、おみつの付き添いの武士、
松木時頼まつきときよりの六人で稽古場けいこばであるおここの長屋へと赴いたところ、おみつたちの前の時
間に稽古を終えて出てきた娘に、おつのが声を掛けられた。

「おつの……さん……」

「まあ、おきよさん。こんにちは」

名を呼ばれたおつのが軽く返した挨拶に、おきよと呼ばれた娘は、口をきゅつと引
き結んだ。おきよがそのまま何も言わないものだから、その場には気まずい沈黙が流
れる。

おみつは初めて会う娘だった。おつのおおきよの関係がよく分からず、おみつは
きよよきよと二人を見比べる。ついでに、おつのお隣の隣におおそめへも視線をやっ
た。が、おおそめはすまし顔で口をつぐんでいる。友人の知人であるなら挨拶くらいは
交わりたいと考えたのだが、そういった間柄ではないのだろうか。

困ったな、と胸に抱いた三味線を持つおみつの手に力が入ったところで、おつのが
また口を開いた。

「おきよさんもこちらで三味線を習い始めたのね」

相手があきらかに何か含みのありそうな様子でも物怖じせず話せるおつのはすご
い。何も気にせず話しているように見えるのだから驚いてしまう。そばで見ているだ
けのおみつは、はらはらするばかりだ。おきよの方は、ますます口を引き結んでそっ
ぽを向いてしまったのだが。

おみつが初めてこの稽古場を訪れた際に前の時間に稽古していた娘二人は、よその
師範しはんのところへ移ったと聞いた。その娘たちと共に稽古を受けていた若い男が、小師
範であるかよと親密になりたいという不純な動機で通っていたため、少々騒ぎを起こ
したのだ。強く腕を引かれそうになったかよを庇おうとした師範のおこつが、押され

て転んで額に傷を作った事は記憶に新しい。年端もいかぬ娘たちが、怯えて通えなくなってしまうのは仕方のないことだろう。

おこうは、娘たちの、よそへ移りたいとの意向を聞いて身元のしつかりした同業に頭を下げ、娘たちが三味線を習い続けることのできるように尽力したらしい。怪我をして自身も大変であったというのに、弟子たちの心情を一番に考えて素早く動いたおこうの心持ちの素晴らしさに、おみつは、自分はここで稽古を受けようと決めたのだった。

幸い、おみつをこの場に誘ってくれた友人たちは、騒ぎのことは大して気にも留めず、いや、師範のその後が心配だからこそ、このままここに通うと言った。そうであるなら、おみつに迷いはなかった。

騒ぎの際には、その時もおみつに付き添ってくれていた松木が対応して事なきを得た。おみつと同じ与兵衛長屋で暮らしている松木は、浪人姿ではあるものの、歴とした綾ノ部落の藩士だ。そのお役目をはっきりと聞いたわけではないが、作次の実の父である綾ノ部落藩主、志木政景の命を受けている……ようである。

そのお役目の対象は作次だけではないらしく、こうして外出するおみつにもよく付き添ってくれていた。これまでは、付き添ってもらって申し訳ないな、などと考えていたおみつだが、あの日は本当に、松木がいてくれて良かったと安堵したものだ。

というのも、騒ぎを起こした男は、剣を携えた松木に凄まれてすぐに退散したし、おこうの額についた傷も、医師が駆けつけるまでに松木が携帯していた道具で処置をしてくれて大事に至らなかったから。

松木さまは本当にすごい、とおみつは改めて松木のことを見直したし、素直に付き添いを受け入れるようになった。

とりあえずそんな訳で、おみつたちの稽古の前の時間は少しの間空いていたのである。が、その時間におこうに習いたいという者が通いだしたのが、どうやら本目であつたようだ。

そうして、稽古場から出てきた三人の娘のうちの一人が、おきよであつた。

おきよはそっぽを向いた先に何かを見つけると、おみつたちの横をすり抜けて、はしたないほどの早足でそちらへ歩いて行った。更には大きな声を張り上げる。

「巳之吉、私、ここにはもう通わない」

「お嬢さん、お疲れ様でござえやした、こちらの、って。え？」

巳之吉と呼ばれた男は、大急ぎでおきよに近寄りながら、話しかけた言葉を驚いて途切れさせる。

「え？ え？ は？ いや、あの……」

ちようど、見送りのために戸口に立った小師範のかよの姿を認めて、巳之吉はわた

わたと手を振った。

「あ、あはははは。冗談きついや、お嬢さん。大層評判の師範のところへ行けるって、昨日から、あんなに楽しみに……」

「うるさいうるさいうるさい！ 嫌ったら嫌なの」

「そ、そんな……」
 巳之吉は、もともと下がり気味である眉を更に下げて、ちらちらとこちらを窺ってきた。おきよのことを、お嬢さん、と呼んでいるので、おきよの家の使用人なのであるろう。

他の二人の娘のお付きの女中は、いつもおつのおおそめの女中が使っている隣の部屋から出てきたので、おきよのお付きだけが別の場所にいたようだ。

「どうやらおきよを送ってから一度戻り、また迎えに来たといったところか。ご苦労なことだなあ、とおみつは思った。

「そういえば松木も、天気が良ければ素振りをして、雨なら傘を差して、表で一人待っている。未婚の男女は、同じ部屋で長時間過ごしてはいけないものだから。」

「そういったことを目にする機会が増えてきたおみつは近頃、作次とふたりで暮らすと言った自分によく許されたなあ、などと考えるようになった。」

おみつは、出会った時からずっと作次とふたりで暮らしている。女であるおみつと

男である作次がだ。ふたりで長屋の一室で暮らし始めてから今に至るまで、誰も何も言わなかったから気にしたことがなかったけれど、もつと気にしなければいけないかっただろうか。

「まあもう、今更である。今更、年頃の男女だから離れて暮らせと言われても、おみつには受け入れられなかった。」

「だって、作ちゃんはもう家族だし……」

「こちらは大層人気な上、伝手もなけりや弟子になれやしねえってところなんですよ？ お世話になるために、奥様がどれだけ苦労をなさったことか」

巳之吉の声に、おみつはふつと考えを引き戻された。
 「そんなこと、知らない」

「おきよは、まったく聞く耳を持たずにむくれている。」

「こちらのお師さんは、武家屋敷にも呼ばれていらつしやるほどの方なんですよ？ そのご縁で武家屋敷に奉公に出られた娘さんも数多い……だから、滅多に、うまいこと通える時間に空きが出るなんてないんです。そんな運の良いご縁に恵まれたってえの……」

「知らない知らない知らない。そんなの、武家奉公とか、やりたかったらおっ母さんが自分でやればいいのよ」

ずかずかとおきよが歩いて行ってしまうから、声はだんだん遠ざかっていく。だが、感情が高ぶって大きくなった声は、はっきりと聞こえてきた。

「嫌よ。おつのが先に習っていたところに後から通うなんて、絶対に嫌！」

ええっ？ とおみつがおつのへ目をやると、おつのは何でもないような顔でひよいと肩をすくめ、黙って微笑んだ。

「あの子、いつも勝手におつのちゃんを目の敵にして、あんな感じでぶりぶり怒ってるんだよねえ」

珍しくすぐに口を開かないおつのに代わって、知らんぷりを決め込んでいたおそめが口を開く。

「感じ悪いったらないわ。おつのちゃんも、放っておけばいいのに」

「そんなわけにはいかないじゃない。同業なんだし、会ったら挨拶くらいしとかない」と

「同業？」

「そうそう。おつのちゃんちとあの子の家、家業が同じなのよ。で、おつのちゃんちの方が繁盛してるもんだから、やっかんでさ。あの子は、顔さえ合わせたらすぐにおつのちゃんに突っかかってくるんだから」

説明したのはおそめだ。

なるほど。商家ならではの事情があるらしい。商家勤めとはいえ、店の奥で縫い物をしていることの多い職人気質のおみつは首を傾げるばかりだ。

おみつの許婚、作次の養父母の店、清兵衛商店は大層繁盛しているが、やっかん
で何かされた、などと聞いたことはない。もしかして、お父つあんやおつ母さん、作
ちゃんなどには突っかかるお人がいるのかもしれないが、おみつには覚えがなかった。
「大変なんだね」

「ううん、別に」

だが、おみつの眩きには、おつのの軽い声が返ってくる。

「え？ そうなの？」

「うん」

「そ、そっか……」

大したことないのか。そっか。

「そうよ。私は挨拶してるのに、挨拶を返さないのはあちらなんだもの。放っておけばいいわ」

「そうそう。おみつちゃんもね。またあの子にあつても、知らん顔しておけばいいからね」

さっきのおそめちゃんみたいに？ と言いかけて、おみつはやめた。

見知ってしまったのだから、知らん顔はできそうにない。返事がなくても、出会ったら挨拶くらいはしようかな、とおみつは心のうちで呟いた。

二 いさかい

その日は、案外とすぐにやってきた。

おみつがおきよと初めて顔を合わせてから、十日ほどが経った頃の事である。

珍しく、おみつが表で作次と二人で店番をしている時に、おきよが清兵衛商店へやってきたのだ。

「こんにちは」

おみつより先に、作次が愛想よく挨拶をする。すっかり商売に慣れてきた作次は、普段よく見る客かそうでないかの判断が素早かった。あきらかに慣れない様子で店内をきよきよとするとするおきよに、何かお探ですか、とにこやかに話しかける。

「あ、あ、あの、私……」

おきよは、真っ赤になって作次の顔を見つめた。何度か見かけたことのある、作次の整った顔に見惚れた者の反応だ。

おきよは、作次のことを知らずに店に来たのであるらしい。

それは、珍しい客だった。

おみつや作次と同じ与兵衛長屋に住む絵師の遊齋が描いた、作次をひな型とした貸本の姿絵ほんずたえを売っていたことで、作次の整った顔は近隣に知れ渡っているからだ。人気の役者に会いに来るように作次に会いに来て、ついでに遊齋の絵や他の物を買っていき客は多かった。おかげで、店はいつも繁盛している。

とはいえ、遊齋の絵は、もう滅多に店頭に並ぶことは無くなっていった。遊齋は、この頃では引く手数多の絵師となり、清兵衛商店で売る絵を描く暇はなくなってきたのだ。それでも、評判を聞いてやってきた、という客は引きも切らなかつた。

そんな訳で、作次が男前なのを知って来店し、会えて喜んで帰る、という女衆は数多い。多いが、こんな風に真っ赤になって言葉に詰まる客というのは、おみつは久しぶりに見た気がした。

その様子を見て、あまり深入りされたくないと思っただろう作次が愛想を崩さぬままに、すっとおきよから距離をとる。心得たおみつが、にこやかにおきよのそばに寄った。作次は、品物を手に取った別の客の方へ向きを変えた。

「こんにちは、おきよさん」

ほう、と作次に見惚れていたおきよは、びくりと肩を震わせた。

「え？」

おみつを見たその顔に、ゆるゆると驚き上がり……。それから、眉がきゅうと寄せられた。

「あ、あなた……」

「覚えておいでですか？ 三味線の稽古場で何度か顔を合わせております、おみつと申します」

そう。結局、おきよは、おこうに三味線を習うのをやめてはいなかったのだ。出会った初日に、おつのが先に習っていた稽古場など通いたくない、やめる、と大騒ぎして帰ったが、結局翌日も来た。そのまま、ずっと通っている。

そういう人なのよ、とおそめは呆れたように言った。おつのは黙って肩を竦めた。

まあそんな訳で、あの後も何度も、おみつはおきよと顔を合わせていた。

とはいえ、おきよは変わらずそっぽを向いて帰ってしまうので、一方的に挨拶はしていても、名乗りは上げていない状態であった。

やっと名乗れて、おみつは少しほっとした気分である。こちらが一方的に知っているだけという状態が、なんとなく気持ちの良いものではなかったのだ。おきよは、別におみつの名など知りたくもなかったかもしれないが。

「おみっちゃん、知り合いかい？」

別の客の相手を終えた作次が、おみつの言葉を聞いて振り返る。

だが、また店に入ってきた常連客に、作ちゃんお勧めはある？ なんて気安く話しかけられて、にこりと笑顔を向けた。

「おう。いつだって全部お勧めでい」

「あはは。いい加減なんだから」

「なんでえ。おいら、嘘は言わねえよ。うちの品は、いつだって全部、自信を持ってお勧めできるものばかりさ」

「はいはい。見せてもらうわね」

「おう。ゆっくり見に行ってくんな」

一通りのやり取りを待って、おみつは作次におきよを紹介することにした。その間も、おきよの目は作次に釘付けた。

常連客との気安いやり取りには何とも思わなかったおみつの胸の辺りが、何故かもやもやした。だが、おみつとて商家の嫁……になる予定の娘である。にこりと笑って作次におきよを示した。

「こちら、同じ三味線の稽古場に通うおきよさん。稽古の時間が違うから、挨拶をしたことしかなかったんだけど」

本当は、おみつが一方的に挨拶をしているだけで挨拶が返ってきたことはないのだ

が、まあ、詳しい話は今はいいだろう。

「へえ、そうかい。おみつが世話になってます。これからもよろしく」

作次は、にこりと笑って頭を下げた。別に世話になってもいいし、おきよはよろしくするつもりはないだろうが、まあお決まりの挨拶だ。今、いちいち訂正することでもない。おみつもにこりと頭を下げた。

「あ、ああ、ええっと。も、もちろん。いいわよ」

おきよは、また真っ赤になってそれだけ言うと、何も買わずに店を飛び出していった。邪魔にならないように店の端にいたらしいお付きの巳之吉が、ええ？ と大声を上げた。

「お、お嬢さん？ 巾着袋はどうするんです？ お嬢さん！」

慌てて追いかけてながら叫ぶ声が聞こえて、おみつは作次と顔を見合わせた。

「何だったんだ、一体……」

「き、巾着袋が欲しかったのかな？」

「みてえだな」

「後で会うだろうから、一応、持って行ってみる？」

おせきが作って納めてくれている巾着袋は、まだ売れ残りがあつた。おみつが縫った品も、まだ早い時刻だからいくつかが在庫があつた。

「ああ。そうしてやるといいんじゃないか」

作次の言葉に、おみつはその日、自分のおせきの巾着袋を一つずつ手持ちの巾着の中に入れ、三味線の稽古に出かけることにした。

そうして足を運んだ、いつもの三味線の稽古場。

時刻はいつも通り、昼八つ刻午後二時頃だ。稽古を終えて出てきたおきよを見つけ、おみつはぱっと笑顔を浮かべた。

「おきよさん、こんにちわ！」

びくっとおきよが肩を揺らす。少し声が大きくなりすぎていたかもしれない。隣のおつのおおそめも驚いた顔を向けていたから。

おみつは慌てて声を落として続けた。

「ごめんなさい、大きい声を出して。あの、今朝はうちの店へお越しいただき、ありがとうございました」

「あ……」

今朝会った時の様子では、おきよはおみつの顔は覚えていたようだった。なら、改めての自己紹介はいらないだろう、と礼だけを述べる。

うちの店、という言い方は、まだそのうちの子にはなっていないおみつが言うのは

語弊ごへいがあるかもしれないが、店主の清兵衛も妻のおきくも、おみつちゃんももううちの子だよ、と常々言ってくれているので、それでいいことにした。

正確に言おうとすると、色々面倒だ。いや、父は物心ついた頃にはおらず、母を亡くしてからは天涯孤獨てんがいこどくの身ですが、許婚が清兵衛商店の跡取りです、と言えば済むのかもしれない。だが、何故そんな身の上の娘が、流行りの小間物屋の跡取り息子の許婚になどなれたのかと聞かれると厄介だ。

そもそも、その跡取りの作次もまた、清兵衛の実子ではない上に、少々、いや、大きな訳ありである。すでに家を出たとはいえ、大名家綾ノ部藩の藩主の次男というやんごとなき出自。そんなこと、おいそれと説明できやしない。様々な事情があつて今こうなっているが、それをうまく誤魔化しつつ説明するなど、おみつにはとうてい無理な話であつた。

その辺りの事情をすべて承知している松木もまたかなり寡黙かもくな質たちなので、おみつと同じく、上手く話すのは無理であろうと思われる。

「ふ、ふん。別にあんたの店に行つたわけじゃ……」

おきよは、いつものように顔をふいっとそらしかけてから、あ、と戻してきた。

「あ、あの。あの人、は」

「え？」

「い、いえ。何でもないわ」

「そう？ あ、そうだ。あの、これ」

おきよは何か言いかけたが、何故か顔を赤くして口をつぐんでしまった。おみつは首を傾げつつ、まあ、そのうち言いたくなつたら言ってくれるだろうと軽く流す。

そして、三味線を抱えなおしながら、提げていた巾着袋から売り物の巾着を二つ取り出した。

「今朝、私が突然声をお掛けしたのだから、お買い物できずに帰られてしまったのではないかと思つて。お付きの方がおっしゃっていた品を持ってきたのだけれど、いかがですか？ 巾着は、うちはこんな感じで」

「わ。可愛い」

「素敵」

声を上げたのは、おつのとおそめだった。

「あ。えへへ……」

面と向かつて褒められると照れてしまう。

「そう？ 嬉しい。これ、私が縫つたんだあ」

「えええ？」

「うわあ」

二人は大げさに声を上げた。

「え？ おみつちゃんか？ すごい。上手だあ。え？ 本当にすごいよ、これ。ちよつと見せて」

「うん」

三味線を抱えなおしたおつのが、ひよいとおみつが作った方の巾着を手にする。いくつかの端切れを組み合わせさせて模様をかたどっている、おみつの自信作だ。一枚の布で縫うより手間だが、端切れでもできるし模様を作るのが楽しくて、近頃はもっぱらこの形で作っていた。

一つ一つが違う模様になっているから、あれも可愛いこれも可愛いと選ぶのが楽しいらしく、大変な人気商品となっている。端切れを使用しているから、手頃な値であることも人気の理由の一つであった。選びきれずに、いくつかまとめて買っていく人もいるくらいだ。

以前から清兵衛商店に巾着を置いてくれているおせきの品は定番の作りであるので、こちらは昔ながらの作りが好きだという人に売れていた。

おきよの好みがどちらか分らないから、どちらも持ってきてみたのだ。

「私、これ欲しい」

「私も」

おつのとおせめが、きらきらとした目で言った。二人ともが、おみつの作った方の巾着を気に入ったのだという。

おみつは、面と向かってそんな風に言われて舞い上がってしまった。友人に褒められるというのは、ひどく照れくさくて、でもとても嬉しいものだ。

「ありがとう。あの、あのね。好みの色や柄を教えてくれたらこしらえるよ？」

使ってくれる人の顔を思い浮かべながら作るのは、おみつにとっても楽しい作業だ。

「ええ、本当に？ 本当にいいの？ うわあ、嬉しい」

「うわあ。こんなの、ものすごい自慢だよ。おみつちゃん、すごいねえ」

おみつは緩む頬を抑えられないままの顔で、おきよの方へ視線を戻す。これは、おきよに選んでもらおうと思っただけだ。どうかな。気に入ってもらえたかな。だが、視線の先、おきよは何とも言えない表情でおみつたちを見ていた。

「あ、あの」

おみつは慌てて言った。

「急ぎでなければ、おきよさんも、好みの色や柄をお伺いしてお作りする事もできますよ？」

おつのおせめにだけ、こしらえ物を作ろうかと案内したのが良くなかったのかもしれない。おきよの気分を害してしまったかとおみつは慌てた。今朝、何も買わずに

帰ってしまったから、急ぎかと思つて出来合いを勧めてしまったのだ。

「け、結構よ！」

おきよは、つんと顎を上げる。

「あ、そうですね。差し出がましい真似をしました。ごめんなさい」

おみつはぺこりと頭を下げた。三味線を抱えているので、しっかりと腰を折ることはできなかったが。

「どうやら失敗してしまつたようだ」と落ち込む。商売というのは、本当に難しい。おみつは商家の嫁の見習いとして、まだまだ勉強が足りない。

「あなたねえ」

だが、落ち込むおみつの横で、おつのが鋭い声を上げた。

「せっかくおみつちゃんが良いかと思つて持つてきてくれたつてのに。なあに、その物言いは。もし好みじゃなかったとしても、お礼の一つくらい言うのが筋つてもんじゃない？」

「な、な……」

おきよは、一気に顔を真っ赤にして言葉を詰まらせた。普段は、突っかかってくるおきよをのりくらりとかわしているおつのが、こんなにはつきりとおきよに物言いつけたところを見たのは初めてだ。

「あ、あ、あなたには関係ないじゃない。私、頼んでないし」

「そ、そうね。確かに頼まれてもいな……」

「関係なくないわ。大事な友人が理不尽に攻められて、どうして黙っていられるものですか！ あなたねえ、私のことが気に入らなくて私のことをどうこう言うのは良いけれど、私と親しいからという理由で私の大事な人まで傷つけるようなら容赦ようしやはしないわよ」

おみつがとりなそうと挟んだ言葉は、おつのの鋭い言葉にかき消された。

「あら、駄目よ。おつのちゃんをどうこう言うのだから駄目。だって、おつのちゃんこんりんさいは私の大事な人なんだもの。金輪際、やめてちょうだい」

おそめまで口を出し、おきよの目には涙が浮かんでくる。これはいけない、とおみつは真っ青になったが、おきよは、ぐうと唾を飲み込むと涙を止めて叫んだ。

「なによ、馬鹿。おつのなんて大きらい」

そのまま、駆け出して行ってしまう。行つた先には、相変わらずの巳之吉だ。

お嬢さんお疲れ様です、と声を掛ける巳之吉に黙って三味線を押し付けたおきよは、ずんずんと歩いて行ってしまった。巳之吉は振り返ると、ぺこりと頭を下げてからおきよを追いかけていった。

「こつちだつて好きじゃないんだから、お互い様だわ」

「ほんとは」

すっかり鼻息の荒くなつてしまつたおつのとおそめはその日、演奏が乱暴だ、もつと丁寧に弾きなさい、と師範のおこうに散々に叱られながら稽古を終えた。

余計な真似をしたと落ち込んでいたおみつは、勢いが足りないとい叱られた。

そんなことがあつたから、もう来ないだろうなと思つていたおきよはしかし、その後また店に姿を見せたらしい。

しかも、その日から連日通つていくという。おみつは、ここ数日は表へ出ておらず知らなかつたのだが、作次が夕餉の際に話し始めて驚いてしまつた。

おみつは、三味線の稽古の後、おつのとおそめと湯屋へ寄つてから与兵衛長屋へ戻つていた。作次はいつも通りの早仕舞いの後で湯屋へ寄り、与兵衛長屋へ戻つてくる。作次は、帰りに買ったという近頃評判の団子だんごをぶら下げている。

おかずにはなりやしないね、と二人で笑い合う。団子は食後に楽しむことにして、朝の残りの味噌汁を温め、おひつに置いていたご飯を茶碗ちやんによそつた。漬物と、同じ与兵衛長屋に住むおふくが実家の店から持つてきてくれたお菜さいの中から選んで買った卵焼きを並べれば、立派な夕餉の出来上がりだ。

少し早い、二人は早々に向かい合つて座り食事を始めることにした。

一日の半分以上を共に過ごしているのに、いくらでも話すことがあるのは不思議なものだ。

「あの、三味線の稽古場が同じだつていう、おきよさんって娘さんにひどく嫌われちゃまつたつて、おみつちゃん言つてたよな？」

「え？ あ、うん……」

おきよは、おみつが巾着を三味線の稽古場に持つて行つたあの日から、稽古の場で顔を合わせると分かりやすく、つんとそっぽを向いて帰つていくようになった。今まで通りと言えば今まで通りなのだが、おつのだけにそうしていた時と違つて、おみつやおそめにも分かりやすくそうするのである。

おみつは、ほとほと落ち込んでいた。おつのとおそめはといえば何も気にしておらず、元からあだつたのだし放つておけばいいのよ、と言う。おつのなど、あちらから分かりやすく仲違いしてくれたおかげで無理に話さなくても良くなつて助かつている、と笑顔でのたまつた。

そんなわけで、お互いに知らん顔の状態だ。おみつも、流石に目の前でふいっと顔をそらされては挨拶もできず、口をつぐむしかなかつた。そんな状況で口を開いていたおつの凄さを思い知るばかりだ。

おつのは、堪忍袋かんにんちやくの緒が切れたとも言つた。家の者にも、きちんと事の顛末てんまつを話し

て、無理におきよと言葉を交わす必要はないと言ってもらったとのことだ。

おそも家の者には報告済みだと聞いて、おみつも、作次だけでなく、清兵衛とおきくにも話をするににした。心配をかけることはしたくなかったし失敗したことを話すのは恥ずかしかったけれども、話ができる家の人がいるということに、おみつの胸はほっかりと温かくなったのだ。

そうして、与兵衛長屋で作次と二人夕餉をとりながら話した翌日、仕事場である清兵衛商店でおみつは、清兵衛やおきくの前でも事の顛末を話した。

お客様を怒らせてしまつて申し訳なかつたと謝れば、三人は声を揃えて、何言つてんだい、と言つた。

「おみつが悪いことなんて、何もあるめえ」

「そうだよ。いらないにしても、言い方つてもんがあるさね。おつのちゃんが正しいよ」

清兵衛とおきくが言つて、作次もうんうんと頷く。

「おいらが、巾着を持つて行つてやるといいんじゃねえかつて言つたんだから、おみつちゃんが気に病むことなんて何にもねえ。それで言えば、持つていくといいつて言つたおいらがお客さんを怒らせたつてことだ。おいらが考えなしたつたんだ」

「ええ、何言つてるの、作ちゃん？ 私が、持つて行つてみようかなつて先に言つて、

作ちゃんはそうしたらいいつて背中を押してくれただけでしょ？ 作ちゃんが考えな

しななつてこと、あるわけがない」

「いや、でもな、おみつちゃん」

やれやれと、清兵衛は肩をすくめる。

「どっちも悪くねえし、考えなしでもねえよ。あつしら、行商ぎやうしやうの頃は、そうやつて品を運んで見定めてもらつて商売してたんだから、商売として何も間違つちやいねえさ。相手が気に入らなけりゃあ、今回はご縁がありませんでしたねつて言つてお終しめえよ。な、おきく？」

「そうだよ、そういうもんさ。おみつは、いい経験をしたねえ」

「そうだな。ほんとだ。ちげえねえ。いい経験さあ」

清兵衛とおきくは、息ぴったり続ける。

「へこむような経験は、若いうちにたつくさんやつとくもんさ。ね、おまえさん」

「そりゃあそうさ。若えから仕方ねえなあつて許してもらへることは結構あるもんでえ。今のうちに色々やつときゃあいいのさ。今なら、あつしらもいくらでも助けてやれるんだしよ。ああ、そうだ、作次もだぜ？ お前は何事もそつがなくていけねえやあ、あ、もちろん、今回のことは、失敗でも何でもねえよ。ご縁めえがなかつたつてだけのつとでせよ」

なんだかもう、胸が温かいどころか熱くなってきて、おみつはぐすりと鼻をすすり上げた。こみあげてくる涙をこらえていると、そつがなくていけねえってなんだよ、と作次が口を尖らせるのが目に入る。

なんでもちゃんとできちゃう作ちゃんもいけねえのかあ、なんておかしくて、あはは、あははと笑って落ちた涙を拭いた。

幸せだ。おみつはお客様を怒らせるといふ失敗をしたはずなのに、こんなに幸せな気持ちで話を終えられるなんて不思議なことだ。

涙を拭くおみつの背を優しく撫でた作次が報告を引き継いだ。

そのおきよが、このところ清兵衛商店に日参しているという話だ。

「おいら、その人が、巾着をいらねえって言ったことをおみつちゃんから聞いてっからさ。最初は見間違えかと思っただよ。普段の様子を聞いてたら、もううちになんて足を運びたくねえに違えねえって思っっちゃうじゃねえか。だいたい、一回ちらつと挨拶しただけだったから、はつきりと顔なんて覚えちゃいなかったしな」

「あの時、おきよさん、すぐ帰っちゃったもんね」

「ああ。でもよ、あつちから声掛けてきてさ。覚えてらっしゃいますか、おみつさんと同じお稽古に通うきよです、だとき。おいら、そんな時は流石に驚いちゃまってすくすく返事できなかったぜ。こりやどいうことだつてな」

「お前が返事できねえってな、相当なもんだな」

「ちよつと見てみたかったわね」

「な、何言ってるんでい、お父つあん、おつ母さん」

「ははは。いや、お前はいつも涼しい顔で何でもそつなくこなすからよ。驚いて言葉に詰まる様子なんて滅多にお目にかかれるもんじゃねえ。惜しいもんを見逃したな、な、おきく」

「ほんどだね、おまえさん」

何度聞いても訳が分からない話だったが、清兵衛とおきくが笑って流すので、まあいいか、とおみつも一緒に笑った。

そのうち真意が分かる時もあるだろう。

「おみつちゃんが家の者に話をするつてえ頭はねえのかな。おかしな話だぜ」

「ほんどだね」

「まったくだ」

おみつには、心強い家族がいる。

三 清兵衛商店

「その巾着、素敵ね、おきよさん」

「ほんと。粹いもだわ」

その日は雨が降っていた。早めに家を出たつもりだったが、少々遅くなったらしい。稽古場に向かう途中でおみつたちは、すでに三味線の稽古を終えた娘たちが前から歩いてくるのと同じ行き合った。十四のおみつより二つ三つ下かという年頃の娘たち。つまり、おつのおおそめと同じ年頃だ。そこにはもちろん、おきよも含まれていた。しとしとと降る雨の中、娘たちの華やかな話し声はよく聞こえてきた。

「そう？ ちょっと奇抜きぼつなんだけれどね。店の人に勧められたから、買ってみたいのよ」

「店の人が勧めるのも分かるわ。よくお似合いだもの」

「そ、そう？ ありがと。あの、あのね。その店の人つてのが、大層見目の良い方だね。同じ年頃の……」

きゃあ、と娘二人が楽しげな声を上げる。

「え？ え？ その方がわざわざ勧めてくださったの？」

「おきよさん、美人だから。その方、おきよさんに惚れてしまったのかもしれないわよ？」

「いやあだ、そんな……でも、もしそうなら、私、それもいいかも、なんて……」

頬を赤く染めて楽し気に話すおきよは、おみつたちに相對する時とは別人のようだ。近づいてくるおきよの顔を見て、おみつはぽかんと口を開けてしまった。

「こんにちは」

「こんにちは」

「……こ、こんにちは」

おつのおおそめが挨拶をするのを聞いて、慌てておみつも頭を下げる。

すれ違うのがおきよだけなら互いにそっぽを向いて終わりだが、他の娘もいるのにそんなわけにはいかない。

「こんにちは」

との返事が三つ聞こえて頭を上げたおみつは、思わずまじまじとおきよを見つめてしまった。おきよは、他の娘の手前もあつてか挨拶を返してきたが、目が合うといつも通り、ぷいっと顔をそらして行ってしまふ。

「はあ？ 何よ、あれ」

三人が横を通り過ぎていくと、おそめが、あつかんべえと舌を出さんばかりにして言った。

「あの子、普通に会話できたのね……」

おつのは、ひどく驚いた様子で呟いている。おみつは、ほんとにね、という意味を込めて大きくうなずいた。それから、気になっていたことを口にした。

「おきよさん、私の作った巾着を持ってた」

「えっ?」

「ええっ?」

おつのとおそめは、大きな声で驚く。後ろで、お付きの女中二人の驚く声まで聞こえた。おみつの寡黙な付き添い、松木の声は流石に聞こえなかったが。

そう、驚くのも無理はなかった。だって、ここにいる者は皆知っている。おみつが、自分の作った巾着をわざわざ店から持ってきておきよに見せた時の反応を。

おきよは、結構よと突っぱねたのだ。

それを結局購入した上に、人に見せびらかしているなんて。

「信じらんない、あの子。作ってくれたおみつちゃんの目の前で、いらないうって言うておいて」

「なあにがお勧めされた、よ。商人なら、売るためのお愛想の一つや二つや三つ、言

うわよ」

お愛想、多いな? とおみつは思ったが口には出さなかった。

だがまあ、その通りだ。作次も、商人は売ってなんぼだ、と常々言っているし愛想も振りまいている。間違いいではない。いや、でも……

「お愛想、言っていないんじゃないかなあ」

おみつは、ぼそりと呟く。

「だって、自己紹介されて戸惑ったって言うてたもの」

「あ、そうなのね? その見目の良い店の人が?」

「うん」

まあ、見目の良い店の人というのは、作次のことで間違いないだろう。作次の顔の良さは有名なことだし、おきよだって見惚れていたのだから。

「じゃあ、あれ、どういうこと? なんだか、その店の人が、あの子に気がある素振りを見せたような物言いをしていただけだ」

「……」

そんなわけない。作次は、愛想は振りまくが、どんな上客にも特別扱いなんてしてやしないのだ。だって、作次の特別は……

「おみつちゃん。家の人にあの子の事は言ってるんでしょ?」

黙り込んだおみつに、おつのが言う。

「うん、もちろん」

おみつは、話せる家の人がいる幸せを噛み締めたばかりだ。

「なら、放つといたらいいわ。店の方で何とかしてくれるわよ」

おつのは軽く言った。

「そうそう」

おそめも気楽なものだ。

そういえば、お父つあんやおっ母さんも、何にも気にしなくていい、助けられることは助けてやるからって言ってたなあ。

「それより、私、その見目の良い店の人に会いたいなあ。帰りに寄ってもいい？」

「ええ？ あはは」

二人と、互いの家のことを詳しく話したことはなかった。湯屋で知り合った時、おつのは菱屋ひしやの娘だと名乗り、おそめは伊波仙いはせんの娘だと名乗った。おみつはそれらを聞いてとつさに、自分は清兵衛商店の娘だ、と名乗ったのだ。二人は、あの話題の小間物屋ねと心得顔で頷いて、それで終しまいだった。

こんなにも親しくなったのだ。家の者を紹介し合うのは、自然な流れなのかもしれない。

「うん……。是非、紹介させて」

「わ、嬉しい。楽しみ」

「帰りに寄ろう！」

「寄るー」

様々な習い事で忙しい二人だが、少しの寄り道くらいはできると言い張った。女中二人は困った顔をしていたが、無理だとは言わなかった。

稽古を終える頃には雨もやみ、本日も静かに見つめあってから互いに頭を下げる松木とかよを眺める。おみつの付き添いの松木と小師範のかよは、誰がどう見ても互いに想い合っている様子であった。

おみつが三味線を習い始めてから知り合ったのだから、ほんの一月ひとつきほど。

しかも、稽古の終わりに挨拶を交わすのみであるというのに、二人が熱心に互いを見つめあう姿は、瞬く間に人々の噂の種となっていた。

「あのお二人のお姿を見ると、何だかこう、胸がきゅうとするのよねえ」

「分かる。想い合う二人ってああいものなのね」

おつのとおそめが、ほうと息を吐きながらこそりと言う。

流石に、当人たちに聞かせる気はないらしい。二人の挨拶がすむまで、そつと離れ

で見守りながらの小声の談義だ。

「私、お芝居を観ているみたいな気分になるわ」

「分かる」

芝居を観たことのないおみつにはちよつと分からぬ話である。

だが、おつのおおそめがうっとりと言った言葉に、後ろに控える二人の女中もにこやかに頷いていたから、きつとそうなのだろう。

「うまくいけばいいのね」

「ね」

それについてはおみつも同意だった。おみつに付き添ってくれたことで松木に思いができるなんて素敵なことだ。

武家でないかよとでは身分の違いなどの問題があるかもしれない。でも、作次の父親であるあのお殿様なら、頼めば何とかしてくれる気がした。若様をください、と言ったおみつのとんでもない頼みを、笑って聞いてくれた御方だから。

三人は、いつもと違ってこそこそと話しながら清兵衛商店へと歩いた。そうして辿り着いた清兵衛商店は、本日も変わらず、大層な賑わいであった。

「あら。ずいぶんと小さいのね」

おつのが、思わずといった調子で口を開く。

「大層評判になっていたから、もつと大きいんだと思っていたわ」

おそめも口を揃えた。

清兵衛商店は、表長屋の間口二間の土間部分とそこから見えている四畳間の部分にだけ品物を置いて商売をしている。奥に八畳間があり、表に並べきれない売り物と古い帳面ちやうめんが置かれていた。空いた場所で清兵衛とおそめが生活をしている。八畳間は、おみつが昼間に縫い物をする場でもあった。裏長屋で暮らしてきたおみつにとっては大層広く立派な家だ。しかし、おつのおそめにとつては小さなものらしい。

二人の家は、きつともつと大層な大店おおだななのだろう。女中を連れてあちらこちらの習い事に奔走している様子を見ればさもありなん。

あはは、とおみつは笑った。

「そんなに評判なの？」

おみつは流行りの話に詳しくない。こうして、習い事なんてことをするまでは、住まいである与兵衛長屋と仕事場の清兵衛商店を歩き来するばかりの日々だった。たまに季節の行楽に出かけたりもするが、それも、いつも同じ面子めんこである。

与兵衛長屋の面々、清兵衛とおそめ以外の付き合いと言えば、たまに長屋に顔を出す作次の兄や父くらいのものであった。そうすると、店の評判だの何だのは耳に入ってきたようがない。長屋のおかみさんたちとの井戸端会議でも、今更清兵衛商店の話など

誰もしていなかった。身内の評判とは、存外分からぬものようだ。

おみつは、作次と共に通えなくなった湯屋でおつのやおそめと知り合ってから、ようやく世間を感じていた。

「評判よ。それも、かなり前から。こんなに混んでいるんなら、もう少し大きな場所に引越せばよいのに」

「客が入れないと、より多くの品を売りさばけないわよ」
さすが、二人とも商売人の娘である。

「うーん。でも、お父つあんも作ちゃんもね。これくらいが、自分のちょうどいい大きさだつて」

「へえ。そうなの？」

「うん、そうみたい。私も、これくらいがちょうどいいかなつて思ってる」

これより大きくなると、店の端まで目が届かない。

「そっか。まあ、それぞれの考えがあるわよね」

「確かに。大きくなりすぎると目が届かなかつたりするものねえ」

おそめの言葉に、おみつは大きく頷いた。良かった。考えていたことと同じことを言ってもらえて安心した。

混んでいるので表からは入らずに、清兵衛ときくが住まいとしている側の戸、勝手口から中へと入る。どうぞ、と四人を招き入れると、松木は、某はこれにて、と戸口で頭を下げた。ありがとうと礼を言うと、また明日と短く答えて立ち去っていく。その背を見送ったおつのが、また明日もかよ師匠に会いに行かれるのね、と言つて、皆で笑つた。

荷物を置いて住居部分を進み、店内を覗ける辺りへ案内する。住居の方には誰もいなかった。清兵衛もきくも作次も皆、表へ出ているようだ。

「作ちゃあん」

障子をそつと開けると同時、若い娘の甘えたような声が聞こえた。

「ね。これとこれ、どっちが似合う？」

おみつからはよく見えないが、娘は何かを選んでいるらしい。作次にずいと近寄つて、弾む声で尋ねていた。まあ、よくあることといえば、よくあることだ。……おみつが表に出ている時には、あそこまで作次に近寄る人間はいなかった気もするが。

「うわあ、何あれ」

「簪を選ばせるとか、あり得ない」

おみつの前で覗いているおつのとおそめには、よくよく見えたらしい。ぼそりと呟くのが聞こえた。

え？ 簪？
驚くおみつの目に、振り返った作次の顔が映る。やんわりと口角を上げた、お店の笑顔。

「わ」

「わあ、男前……」

「お好みのもんをお選びくださったらよろしいと思いますよ？」

おつのおおそめの眩きに作次の平坦な声が被さる。まだ少年らしい高めの声だが、口調は大人っぽかった。

「どちらも良くて選べないから、作ちゃんに選んでほしいなって思ってた」

娘は、なおも言い募った。

だが、作次は動じない。笑顔を崩さず、すらすらと口上を述べる。

「どちらも良いでしょう？ うちの品は、どれも自信を持ってお勧めできるもんばかりですからねえ。どちらを選んでも、後悔はさせませんや」

「ええ？ でも……」

「作ちゃあん。お会計お願あい」

「へえ、ありがとうござえやす」

また別の娘に呼ばれた作次は、すいっとその娘の側を離れた。

「あら、手慣れてる」

おそめが言う。

「まあ、そうじゃないと、そこら中に簪を選んでもらったって子が溢れて大騒ぎになるわよねえ」

おつのも頷きながら答えた。

「うわあ、大変」

「ん？ でもさ。ほら、あの子。巾着を勧めてもらったー、なんて言ってたじゃない？」

「言ってた言ってた」

「そんなわけなくない？」

「ないない。あの人、そんな失敗、絶対にしないわよ。そつがないもの」

そつがない。作ちゃん、このあいだ、お父つあんにも言われてたな。そうか。作ちゃんは、よその人から見てもそつがないのか。

おつのが、ごしごしと二の腕をさする。

「じゃあ、あの子の思い込み？ 怖……」

「いやあだ。うーんでも、あんなに男前じゃ、あの手この手で気を引こうとされても仕方ないか」

立ち読みサンプルはここまで